きっと君は輝ける
松山学院高 不登校経験者向けコース

不登校となった生徒を受け入れ、再スタートを切る機会を提供しようと、松山市北久米町の松山学院高校は2022年度から普通科の中に専用の「Newコース」を設置している。生徒の実情に応じた指導方針で、今年は昨年の2倍を超える120人弱の生徒が学し、4クラスにわかれて学んでいる。一度は学校から遠ざかった生徒たちが、自分の居場所を見つけ、社会生活に向かって歩みを進めようとしている。指導者が向けるまなざしは温かく、「きっと君は輝ける」と未来を信じて寄り添う。コース設置から1年余り、現場の様子を取材した。（敬称略、宇和上翼）

5月のある朝、松山学院に各教室で礼拝をしていた、1時限目が始まる前、落ち着いた雰囲気の中、生徒たちは聖書の一節を聞き、賛美歌を歌う。

Newコースは1年が4クラス、2年が2クラス。ある教室をのぞくと生徒約30人のうち、出席したのはわずか数人だった。礼拝を終えると、担任とこの日実施する学校行事などについて話をしていた。時折笑い声が交じる。なごやかなひとときが過ぎていった。

担任はコース専用の職員室へ向かう。ホワイトボードにまだ登校していない生徒の名札を次々に張っていった。1時限目開始以降に登校した生徒は、職員室に顔を出す。ホワイトボードに登校時間が記入されて出席扱いになる。なお、卒業するために必要な授業は2時限目以降に組み込まれている。

生徒は さまざまな事情から、学校生活から距離を置いた過去を持つ。中には起立性調節障害や自閉症スペクトラム障害（ASD）と診断された生徒もいる。

しんどくて50分の授業を受けきれない生徒のために、空き教室を活用した待機スペースもある。授業に出て一定時間を過ぎれば途中で退室し、ここで休んでも構わない。1学級当たりで数人程度が利用している。

同級生は、休む生徒についてあれこれ理由を尋ねるようなことはしない。コース長を務める尾下桂子（59）は「みんなそれぞれの経験がいいと考えているんでしょうから、そっとしておく方がいい」と話す。2年生のある女子生徒は居心地の良さを強調する。「気持ちが優れない日も、みんなあまり詮索せずにいてくれる。だから学校に嫌な思いがあまり頑張ろうと思えたんです」とほほ笑む。

ある日の始業前、Newコースの教室は10人未満とまばらだった＝5月、松山学院高校

授業風景は他の高校と大きな違いはない。進学を視野に入れた生徒も多く、放課後に実施する2年生の補習ではコース外の生徒ともに受講する姿があった。

Newコースの設置を推進したのは、22年度から校長を務める吉田慎吾（64）だ。県教育委員会で指導部長などを務めたが、元々は中学校の教員で不登校の生徒と向き合った経験がある。

吉田が声をかけた元中学校教員で、尾下もその一人。中学3年生の学年主任となり、不登校生の進学で苦心したこともある。「誘いを受けたとき、指導は一筋縄ではいかないと予想したが、不登校から立ち直りを支える県内の土壌はまだまだだとも思った。『なにかの縁』と思ってお受けしました」

教員たちが大切にしているのは生徒の表情や体調への目配りとコミュニケーション。生徒が気落ちした姿を見かけると、近くの椅子に座り雑談をするなど、とかく、考え込ませず前向きになれるよう促している。◇

詳細は愛媛新聞ONLINE「Special」に掲載しています。

次回から3面に掲載します